

平成 27 年度の博物館館園実習について

九州保健福祉大学学芸員養成課程

平成 27 年度の博物館館園実習（学外実習）では、7 名の実習生が各館園での実習に参加している。
内訳は、下記の通りである（五十音順）。

愛媛県立とべ動物園 1 名

到津の森公園 1 名

北九州市自然史・歴史博物館 いのちのたび博物館 1 名

倉敷市立自然史博物館 1 名

神戸市立須磨海浜水族園 1 名

宮崎市フェニックス自然動物園 2 名

以上のように本年度は総合博物館 1 名、自然史系博物館 1 名、動物園水族館 5 名という動向であった。こうした傾向は例年の実習生と同様であり、本学の専門性を考慮すると当然とも言える。だが、学生が大学学部卒業後に経験するであろう市民の生涯学習に対する多様なニーズにも対応可能な柔軟性を養成していくという立場から、博物館の様々な分野に関わる Museum Basic を根本とした学習活動を今後も展開していきたい。

博物館実習において実習生を受け入れて頂いた各館園には、ここで感謝の意を表したい。

宮崎市フェニックス自然動物園 (宮崎県 宮崎市)

実習期間：平成 27 年 7 月 23・24・27～29 日

薬学部 動物生命薬科学科

黒木 聖代

私が実習をさせて頂いた、宮崎市フェニックス自然動物園は 2 度の誕生を果たした動物園である。1 度目は昭和 46(1971) 年 3 月 24 日に「フェニックス自然動物園」として開園した。そして、平成 13(2001) 年 9 月 8 日に、「宮崎市フェニックス自然動物園」として、2 度目の開園を迎えている。

かつてのフェニックス自然動物園では、ミゼットポニーの日本で初めての繁殖に成功し、日本動物園水族館協会より繁殖賞を受賞したのみならず、ダチョウの人口ふ化に成功し国産ダチョウ第 1 号を生み出し、さらに、国内初の混合飼育を実施し、これも成功させた。この様にさまざまな深い歴史を持つ動物園で、平成 27 年 7 月 23 日から土日を除いた 5 日間、学芸員実習をさせて頂いたのであった。実はさらにまた、実習後の 6 日間をアルバイトとして引き続きお世話にもなった。

動物園の特徴としては、ゲートを入ってすぐになだらかな登り坂があり、ここから日向灘が一望できる。200 m の流れるプールをはじめ遊園地が併用されている。250 羽のフラミンゴによる華麗なフラミンゴショーが行われており、楽しみながら学習できる空間を形成し、さらに基本理念にあるようにしっかりと市民の憩いの場ともなっていた。また、多くのバリアフリーや点字ブロックが見られ来園者にやさしく、ヤギの太行進やチンパンジーのアクリル板を使っの餌やりなど、動物が生き生きとしているように見えた。

このような恵まれた環境で、私を含めた 3 人が実習生であった。実習前の課題は無かったが、3 日前には実習の服装 (①動きやすいズボン×3、②タオル×3、③靴下×3) を熱消毒してもらうために郵送した。そして当日、私たちは主にサマースクールの補助の補助を行った。

このサマースクールは、夏休みに小学生を対象として実施されているもので、動物の餌やりや掃除などの飼育実習・ふれあい・勉強会・水泳といった体験学習を通し「動物を好きになってもらおう。興味をもってもらおう」また「友達づくりの場」といった事を目的として行っている夏限定の動物園学校である。

サマースクールでは 1 日に参加する子供達は約 100 人おり、そして、1 班 20 人ほどの班が 5 つに分かれて行動した。班の種類としては、1 年生から 3 年生を対象としたウサギ班・カメ班・ロバ班。4 年生から 6 年生を対象としたキリン班・ラマ班にそれぞれ担当者が 1 人付くことで構成されていた。私はロバ班の担当となった。5 班中 2 班と飼育実習の際は飼育員が付いているが、それ以外はすべて実習生が誘導、監視を行なわなければならない。私は子供に動物園を楽しんでもらい、少しでも多くのことを学んで帰ってもらおうという意識を持って励んだ。なぜなら、動物園の役割として「教育」「レクリエーション」「研究」「自然保護」があるということを学んでいたからだ。しかし、机上での知識だけではうまくはいかなかった。1 日目から悪天候のため予定されていたスケジュールが中止になり、私たち実習生は戸惑ってしまってスムーズには動けなかった。それに比べ、飼育員のいる班は天候が回復するまでの時間に動物クイズをしたり、野生動物、特に絶滅の危機にある動物の話をするなど臨機応変であった。「いかなる時でも、来園者を楽しませる、学んでもらう。」私が 1 日目に学んだ専門家の役割である。

その日私は、家に帰ってから、子供たちが驚いてくれそうな知識、興味を持ってくれそうな動物に

関する話を調べ、2日目に備えた。

2日目から最終日までは天候に恵まれ、予定通りの流れで進められた。私が調べてきた知識は飼育実習場所への移動時間、周りに打ち解けられずにいる子供への対応の際に引き出すことができた。

1日目は悪天候のためできなかった飼育実習では、ロバの小屋の掃除を行った。まず、子供たちにロバを観察してもらった。その時、飼育員は近くにあるポニーの広場を子供たちに見てもらい、ポニーとの違いを間違い探しのように見つけてもらっていた。例えば、耳と尾が大きく違う。ここで私は、図鑑やテレビではなく実際に自分の目で確認でき、学べるので動物園の良さを改めて感じる事ができた。次に、ほうきを使い落ち葉と糞を集めて掃除を行った。最後に、餌としてアルファルファとスーダンを与えた。



写真：リスザルの餌の切り方を子供に教える

もう1つの飼育実習として、リスザルの餌を包丁でカットしてもらった。リンゴやキャベツなど9種類のものをカットしてもらい、リスザルに与えた。その際に、子供たちにサルがどの食べ物を一番最初に食べ、また、どのサルが最初に食べるのかを観察してもらった。この時の飼育員の役割としては、子供たちの道具の使い方に注意し、清掃の際は動物の安全にも気を配っていた。

動物ふれあいの時間では、ボールパイソンというへびに触れてもらった。その際に、飼育員がへびの生息地、餌、触り方をそれぞれユーモアのある3択クイズにして興味を引いていた。例えば、餌のクイズでは①虫②魚③雛の3択を出題し、答えは③の雛だと伝える。そして、雛がかわいそうだという声が出ると、唐揚げが好きな人、ケンタッキーが好きな人と手を挙げさせ、人間と同じだということを納得させる。また、触り方も人間と同じだということを分かりやすく教えていた。私は、動物園で学芸業務ができる職員になるのなら、今回出会った飼育員のように動物のことを楽しく来園者に教えられ、人を引き付けられるようになりたいと思った。

またこの時に、動物が苦手な子供への対処も学ぶことができた。動物が苦手な人にも、少しでも好きになってもらおう、興味を持ってもらおうと努めるのも学芸員の役割だと感じることもできた。さらに、動物に触れたら必ず手を洗うことを促し、身体の安全にも注意をはらっていた。

この博物館実習を通して、宮崎市フェニックス自然動物園では、サマースクールを通じ教育普及に力を入れていることが分かった。子供たち自ら、動物の餌をカットしたり清掃することで、この動物は何を食べているのか、どこで暮らしているのかなど楽しみながら学んでいた。そして、その子供たちの学びを支えるのは学芸員の役割だと実際に博物館で働くことで知ることができた。さらに、動物園で働く飼育員は、来園者と動物の安全にも配慮することが大切だと感じた。

もし、また博物館実習を行える機会があったなら、次回は美術館や考古博物館での学芸員の役割を実際に経験したい。

倉敷市立自然史博物館 (岡山県 倉敷市)

実習期間 8月18日～8月23日

薬学部 動物生命薬科学科

米田 美里

1983年に設立された倉敷市立自然史博物館で、岡山大学生2名・岡山理科大学学生2名(うち1名はインターンシップ)と、私を含めた計5人で6日間の実習に参加した。この博物館では、地学・植物・動物分野の資料を展示しており、それぞれ岡山県という瀬戸内海に面した気候で発達した生態系や地質が学習できる。

表：実習のスケジュール

月日	内容
8月18日	オリエンテーション / 昆虫・脊椎動物分野：展示メンテ・標本整理ほか
8月19日	昆虫・脊椎動物分野：脊椎動物標本作製ほか
8月20日	植物分野：植物標本の整理 / 植物文献の整理 / 標本情報の活用など
8月21日	地学分野：地学資料の同定と整理 / 調べる会準備
8月22日	動物分野：展示事業の実際
8月23日	教育普及活動の実際：「標本の名前を調べる会」

実習は、表1の日程で1日に1分野、各分野の担当の学芸員の方に教わるという形で実施された。普段勉強する機会の少ない分野の資料を取り扱うことで、自分の中でも、興味の範囲が広がる非常に良い体験となった。

この実習で特に印象に残ったことをいくつか紹介したいと思う。

今回の実習では、植物分野において標本作製の課題が出ており、事前に宮崎県延岡市の北川地区にある家田湿原にて、植物の収集を行った。植物の水分を完全に除いたものを博物館に持ち込み、資料となる植物の収集から標本作製、博物館における情報としての管理・保存・収蔵と、一通りの作業の流れを体験することができた。



写真1：半田ごてで、半紙を貼り付け植物を固定する

他に、昆虫分野においても昆虫標本の保存を体験させて頂いた。昆虫標本は、採集者によって分類され、ピンで留めてドイツ製の昆虫箱に収蔵される。

資料において保存方法はそれぞれ違うものの、長期間保存できるものにするには大変時間を費やすことが分かり、また物によっては、非常に壊れやすく慎重に扱わなければならないため、手技とそれに配慮できるための知識を持つておくことの大切さを改めて感じた。

また、それをこなす学芸員の業務の多さに驚いた。実際、寄贈された動物の毛皮や昆虫標本など、保存のための処理や、データベース化されていない状態の資料が多くあり、手間やスペース的な問題から、活用しきれていない現状であることを学芸員の方の話から伺えた。資料を有効に活用するためにも、深い知識を持つことが必要であると感じた。

次に、動物分野の実習で行った「展示改正プラン」の作成である。実習生は、自由に展示室を見学し、各自考えたプランを発表し、ディスカッションを行った。私の考えたプランは、先述の通り活用されていない資料が収蔵庫にあったことが印象に残っていたので、その活用法として

①: ジオラマの作製
②: クイズとしてのハンズオンコーナーの設置とそのヒントとして生態的特徴の記載
③: 目線の高さに考慮した展示物の並び替え

この3つを考えた。

グループディスカッションでは、私の案の「全年齢が視覚的に楽しめることに配慮した並び替えや参加型の展示」には賛成という意見も挙がった。しかし、それを実現するとなるとスペース的な問題、そしてやはり有効に活用されるのかと言った現実的な問題もまた挙がった。来客者がより楽しめる、理想の展示案が自分の中であるものの、そういった博物館側の問題への配慮が足りなかった。

この企画改修プランは、数年に1度、実際に学芸員の業務の一つとして行われているそうである。実際に博物館で学芸員として展示改修を担当して考えるようになったとしても、今の自分の感覚では企画改修プランが採用されるには厳しく、また、もし採用されたとしても、博物館の経営が成り立たなくなってしまうのでは、という恐れを感じた。私の案と違い、そういった経済的な面に考慮した人、絶滅危惧種等についてより深い教育効果の得られる案を考えた人、足跡や豆知識を周辺に貼りつけ、来館者に楽しんでもらう工夫を考えた人など、私とはまた違う視点で考えられた案を見るのは、大変勉強になった。

私が特に参加を楽しみにしていたのは、教育普及活動「標本の名前を調べる会」であった。この会では、実際に各分野の専門家の方をお招きして、持ち寄った標本の同定を行う。当日は、植物分野で学んだ標本の作り方の実演と、受付や誘導を行った。

参加者は夏休み期間中ということもあり、子ども連れの親子や子ども同士で来ている人が多く、中には毎年参加しているという常連もいた。専門家の方や学芸員の方の教え方は非常に興味を引くのが上手く、傍で見ていた私まで思わず引き付けられた。専門的な知識を多く持っていればもっているほど興味を持ってもらえる機会が増え、より楽しんで貰えるのだということが分かった。また、倉敷市立自然史博物館では他にも季節に沿った様々な教育普及活動を行っているが、このような活動には、友の会(ボランティア)の育成や地域の人々の協力が必要不可欠であることが分かった。

企画を考える上でのヒントも多く得られた。その一つが地学分野で行った石膏の三葉虫・アンモナ



写真2：石膏を使って作製したレプリカ

のように誰もが楽しみ教育効果の高いものであることは、企画を考える上で重要である点を改めて実感した。

今回の実習を通して、今まで学内実習や授業以外でも行ってきたワークショップが学んだ知識を自分の中で活かせることに気付く、自信にもつながった。しかし、その反面で自分にはない能力や経験不足による考えの甘さを多く感じた。これから自分がどのような能力を身につけるべきなのか多く気づけたのは、自この実習の一番の成果であるように思う。また、他の分野を勉強している大学生との交流で視野が広がり、その活動の積極性から今後の意欲が大変高まった。これからも視野を広げながら、多くのことを経験したいと考えている。

イトのレプリカ製作である。作り方は型に石膏を流し込んで1時間ほど置いておくだけであり、比較的短時間で誰でも簡単に製作することができる。また、型自体が本物の化石から取られたものであるため、貴重な化石の資料の形体を実際に間近で触れながら、家に持ち帰ってから何度でも見ることができる。まさにワークショップに適した工作である。

石膏を使ったレプリカは、様々な化石以外の資料の形体の観察にも生かせるのではないかと感じた。また、石膏に限らず、こ

神戸市立須磨海浜水族園（兵庫県 神戸市）

実習期間：平成 27 年 8 月 1 日～8 月 16 日

薬学部 動物生命薬科学科

米谷 朋隆

神戸市立須磨海浜水族園は、兵庫県神戸市須磨区にある。1957 年に神戸市立須磨水族館として開園し、1987 年に旧施設に代わり現在の名称になった。飼育生物は約 600 種類おり、代表的なものはバンドウイルカやラッコなどの海獣のほか、ピラニアやピラルクといったアマゾンの生き物、日本国内では須磨水族園でしか見られないパイコといった魚もいる。自分が実習に行った時期には、特別展「須磨怪奇水族園 古今東西！ 水辺の妖怪」が開催されていた。カッパや人魚、海坊主、クラークンなどの水辺に関係している妖怪の模型や、樹脂包埋された資料などが多数展示されていて、妖怪にまつわる様々な説などにとても興味をそそられた。その他にも、アマゾン館や世界のさかな館といった魚類の展示から、ペンギン館、ラッコ館など海獣の展示、オオアナコンダ水槽といった水辺に棲む爬虫類なども展示している。

実習先に須磨水族園を選んだ理由は、実家から比較的近いところにあったのと、子供のころから何度か行っていたのでなじみが深いことがあったので、実際の作業について興味があったのからであった。今回、自分が担当した部署は須磨ドルフィンコースト（以降 SDC と記す）だった。SDC は特別展の一つで、須磨海水浴場の一角にあってイルカを網で仕切りをした海に放し、海の中を自由に泳ぎまわる姿を見てもらうという展示であり、海水浴場にいる方も自由に来てもらえるようになっていた。普段は 7 月から 8 月終わりまで開催されているが、今回実習に行ったときは台風の影響で 7 月中は開催できない状態だった。台風で波が荒く、海のゴミが流れてきて流木やビニール袋、さらにはクーラーボックスや、コンテナボックスなどの人の身近にある物も海に流されてきていた。その他、海に浮かべるブイや網など流されないものまで台風で流されてきていた。それに、台風が無くなってもまだ波が荒かったので海岸のゴミが後を絶たずイルカを出すことが危険で出来なかった。そのため、7 月中はイルカを出さずに海岸のゴミを拾っていたという。8 月近くになると波も流れてくるゴミも落ちてきて、イルカを出せる状態となったので、ようやく SDC が開催された。

準備するものは動きやすく汚れてもいい服と長靴と最初は聞いていたが、当日行ってみると長靴ではなくビーチサンダルかクロックスの方がいいと言われたので、早急に準備を整え、二日目からはクロックスを履いた。持ち物はお昼の弁当・筆記用具・メモ帳・タオル・腕時計。SDC では来園者参加型のイベントがあったので、腕時計は必須で忘れると時間が分からず満足に動けない。従って時間を把握するのにとても重宝した。

SDC でのイベントは 2 つあり、一つが「海辺のドルフィンウォッチング」で、普段は入れない海に膝ぐらいまで浸かり、間近でイルカのレクチャーを見るというものである。もう一つが「イルカとともだち」というイベントで、栈橋を渡り浮島まで行ってイルカに餌を食べさせたり、サインを出したりと言うようなトレーナーの体験ができるものである。どちらも普段体験できないものなので、人気が高く、午前中には午後の分のチケットが売り切れるほどであった。

自分の実習中の作業内容としては、SDC に訪れる方に説明と海に入らないようにという注意、栈橋を渡られる方へのライフジャケット着用のお願いと監視、SDC に訪れた人の数のカウントが主な仕事内容だった。

またイベント実施中は参加者から預かった荷物の管理、イベント会場に入らないようにという注意・監視を担当した。朝8時に水族園に入園しSDCには8時半に入ると、浜辺のゴミ拾いから作業をはじめ、9時くらいに海にある生け簀に行き、イルカ健康チェックをした。健康チェックは呼吸数のカウント、体温測定、イルカをよく観察してビニールなどの異物を食べていないか、けがの有無、その他の異常がないかなどを診た。その後、少しサインを出してイルカ健康チェックは終わる。

健康チェックの後に生け簀の中と外の手の届く範囲のゴミを取り除き、それからボートで海に浮いているゴミを拾いに行く。終わったら浜辺に戻り、準備をして10時にはSDCを開園する。

実習をしていて様々な問題が発生した。自然と動物・人が相手なので、自分としてはとても大変だったのだが、例えば浜辺でイベントを行なう際に波がひどく荒れていた時には、トレーナーの方の判断で急遽中止にしたり、場所を変えて波が比較的穏やかな所でイベントを進めたりと、色々な問題が発生した。だが、臨機応変に冷静な判断ができれば、その場を乗り切れるということを目の前で実感した。今回、この須磨水族園での実習に参加して、最初は浜辺で来園者の接客や浜辺のゴミ拾いをするだけで、イルカの飼育関連に全く触れていなかったのも、「果たしてこの実習には意味があるのか」とまで疑問に思っていたのだが、続けてやっていると、今回は展示資料がイルカであり、展示室が浜辺という事がよく理解できるようになった。そうなってくると、この作業も展示資料をよく見せるために必要な作業なのだと考えるようになって、一つ一つの作業にしっかりと取り組めるようになった。

接客も、来園していただいた方にできるだけ楽しく、かつ分かりやすく伝えるにはどうすればよいのかを考えてみると、喋る言葉一つ一つを考えながら話していかないと全く伝わらない、もしくは全く違う解釈をして誤解を招きかねないという事がわかり、慎重に言葉を選びながら話すようになった。最初は疲れて大変だったが、1日1日が過ぎていく度に、確実に自分の中で何かが成長している気がしてだんだんと楽しくなり、後半は逆に早く館に行きたいと思うようになっていた。

今回、飼育などに関わる作業はできなかったが、飼育とは違うものを学ぶことができた。今回学んだことはこれから社会に出て使えるような事や知識ばかりだったので、どのような仕事についても、この実習で学んだことを常に心の片隅に置いて、活かしていきたいと思う。

愛媛県立とべ動物園（愛媛県 松山市）

実習期間：平成 27 年 8 月 8 日～8 月 18 日

薬学部 動物生命薬科学科

佐竹 愛花

私は愛媛県立とべ動物園において、平成 27 年 8 月 8 日（土）から 8 月 18 日（火）の期間のうち 12 日を除いた 10 日間、実習に参加した。地元が近く、子供の頃からこの動物園には何度も足を運んでいた。また、このとべ動物園は、よく知られているようにホッキョクグマの人工哺育に日本で初めて成功した動物園であり、個人的にもクマに興味があって、実習先を決める時期にはちょうど卒論でも「クマとヒトとの文化的関係」をテーマにしようと準備していた。しかし、何と言っても何度も来ている動物園だからこそ、ここの職員さんがどんな仕事をしているのか、来園者としてではない立場で内側を知りたかったのが選んだ理由である。

とべ動物園では、主に 1 係・2 係・3 係・教育係のそれぞれの飼育員と、病院・調理係に分かれている。私は教育係の指導での実習に参加した。各課の職員は教育係で 4 人、他の課は 8 人～10 人で構成されていた。

実習初日はポニー・コリデール・ミミナガヤギ・ヤクシマヤギの担当となり、午前中は小屋掃除と餌の準備、午後はポニー乗馬イベントの手伝いとパドックの掃除を行った。結構体力が必要だと感じた。餌の置き方は工夫がなされていて、動物の力関係によって食べる量が減ってしまわないように部屋の対角線上に餌を配置したり、入口から縦に並べて置いたりしていた。

2 日目はアヒル・コールダック・キバタン・ウサギ・モルモットを担当した。まず小屋の掃除をして餌を適切な大きさにカットし、その後はふれあいイベントの手伝いと、会場であるふれあい広場の掃除などを行なった。休憩時には動物の特徴や生態を教示して頂いた。ふれあいイベントでは、お客さんの膝にウサギやモルモットをのせてあげたり、触る際の注意点を説明した。職員はお客さんが菌を持ち込まないように、また持ち帰らないよう手洗い消毒を徹底して呼びかけていた。

3 日目は月曜日で休園日であったが、飼育員さんたちはいつもより忙しそうに作業していた。休園日は普段できないカルキ掃除などの大掃除や、草引き会議を行っていた。この日の担当は、アオバト・オオコノハズク・ブッポウソウ・キボウシインコ、さらには愛媛県内で保護された動物達が一時的に飼育されている保護鳥獣舎の鳥も担当した。他にも展示室の掃除に従事した。

とべ動物園で行なわれている企画展は、主に教育係の担当者が考え、展示物も作成しているとのことである。企画展示中は、部屋の施設管理、掃除展示物の修理、補充をしていた。

4・8・9・10 日目は 2 日目と同じ動物担当で、やはり同じように小屋掃除とふれあいイベントの手伝い、ふれあい広場の掃除を行なった。他にもその日によって植物の水やり、ハンドソープや消毒の補充、物品の補充さらには洗濯物を取りに行き畳んだり、堆肥を捨てに行ったりした。10 日目は平日の開園日だったが、ふれあいイベントを休みにして、ウサギとモルモットの小屋の大掃除をした。「今日はふれあいイベントはないのか？」と聞いてくるお客さんが結構おり、イベントを楽しみに来られている方が多い事を実感した。

5 日目は、初日と同じ動物と、それに加えてアオバト・キボウシインコ・ブッポウソウ・オオコノハズクも担当した。この日はキボウシインコの調子が悪かったので入院室に連れて行き、レントゲンを撮ったりして獣医さんの診察を受けさせた。飼育員さんはちょっとしたことも逃さずにしっかりと



写真：ふれあいイベントにて、子供にウサギを触ってもらう

観察していて、獣医さんに相談したり報告をしていた。

6日目は、2日目と同じ動物、さらに加えてカエル・カメ・ヘビの世話も行なった。このカエルとカメとヘビの餌は、園内の落ち葉の中や木の周辺を歩いて回り、採ってきて与えている。

今年は、8月14・22・29日、9月5日、10月3・17・24日に夜ZOO(夜間体験)が行われていた。ちょうど実習期間に被っていたので準備を手伝ったり、実習時間外ではあったが、園内をみてまわり、さらに実際のイベントを見たりして、飼育員さんの作業を確認できた。それぞれ担当動物の説明をしていたり、迫力のある餌やりを見せたり、来園者にエサをあげてもらえるようにしたり、ちょっとしたワークショップを行ったりたくさんのイベントを行っていた。夜ZOOを行うことで、来園者は夏の暑い日でも動物園に来やすくなり、普段あまり活発に動いている姿の見えない動物が活動していることがわかる。また、昼とは違った雰囲気を楽しむことができる。飼育員さんにとっても、イベントをすることで来園者の反応をより近くで感じることができ、たくさんの質問を聞いて答えてあげることができるようだ。

7日目は、1日目と同じ担当動物だった。作業の流れも似ていた。この日は、ポニーの爪切りを見せてもらった。爪が後ろに曲がってしまって足の着地が変になっていたので、切断することになったようだった。飼育員さんが保定して、獣医さんが糸鋸のようなもので切断していた。切断した爪の内部は白くなっており、さらに中心部あたりには膿がたまっていて柔らかくなっていた。ポニーはウサギやイヌと違って体も爪も大きくて保定や切るのも大変だし、動くので踏まれたり、怪我しないように

注意しながら行わないとならなくてとても大変だと感じた。ポニーの体調管理は餌の食べ具合、様子の観察、ブラッシングして全身を触ってみたり、足の「裏ぼり」をするなど動物によってさまざまな体調管理の方法があることを学んだ。

この実習で学んだことの1つ目は、餌となるコウロギやミルワームの値段が高く、そのためできるだけ飼育員が自分で採取したり、繁殖させて経費を削減しようと努力しており、さらに魚や笹の葉の収集にはボランティアの方々に協力してもらっている。

2つ目は、月曜日の動物園は普段より忙しいということである。休園日だから休みというわけではなく、大掃除から始まり、会議、動物たちの大掛かりな治療など、この日しかできないことが思っていた以上にたくさんあった。

3つ目は、職員は来園者がより楽しみながら動物についてたくさん学んでもらえるように、考えながら働いているという事を実感した。動物を説明する際にも少しでも親近感を抱いてもらえるように、出身地を交えた話や分かりやすいものを例にして説明をしていた。その中に大事な内容もしっかり交えつつ豆、知識も教えていた。

ふれあいイベントでは、動物にただ触ってもらったらいいいというわけではなく、お客さんの安全もしっかりと確認しつつ、動物のストレスも考慮しなくてはならないということがよくわかる。ふれあい活動は親が「せっかくだから」と子どもに動物を触らせようとするが、触れようとしないう子には無理やり触らせることはおこなわず、「まず(動物に)挨拶からしてみて、今度来た時になでてあげてね」といったように、やさしく声をかけているのが印象的だった。動物に無理やり触ることで嫌いになってしまわないようにという配慮と、その一方でせっかく来たのだから楽しい気持ちで楽しい思い出になってほしいという配慮からだそう。このようなちょっとした心づかいが大事なんだと感じた。

これまで述べてきたように、今回の実習では非常に多くのことを経験し、学ぶことができた。動物園に限らず、日常生活や社会一般でも見習ってできることがたくさんあったと思う。今後、この経験を社会の中で生かしていきたい。

宮崎市フェニックス自然動物園 (宮崎県宮崎市)

実習期間：平成 27 年 7 月 23・24・27～29 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

富田 皓

宮崎市フェニックス自然動物園は宮崎市にある動物園で、私を含んだ 3 人で今回 5 日間の日程で実習を行った(うち他大学 1 名)。実習の事前課題などは特になく、実習開始前日の打ち合わせで渡された資料を見ておく位だった。私の実習期間中は小学生が夏休みということもあり、サマースクールという企画をやっていた。サマースクールとは夏休みに小学生を対象とした動物の餌の世話や掃除などの飼育実習、ふれあい・勉強会・水泳などの体験学習で、実習ではサマースクールで動物のことを観察し、学び遊んで楽しんでいる子供たちを 1 日怪我や事故などがないように誘導するというものだ。小学生は 1 日約 100 人ほど来場し、我々実習生 3 人と動物園の飼育員の方 2 名でカメ班・ウサギ班・ロバ班・ラマ班・キリン班の 5 つの班に分かれた。私はラマ班を担当した。ラマ班は小学校高学年のグループで、1 日平均 20 人前後だった。実習の時の服装は帽子と T シャツを動物園のものを借りて、ズボン・タオル・靴は自分のものを使用した。ズボンとタオルは殺菌のために事前に 3 セットほど送っていた。

実習の 1 日の流れは朝 7 時 45 分に動物園入口に着替えて集合し、8 時には受付に座って参加者から参加費を徴収してかわりに名札とテキストを渡し、その際忘れ物と食べ物・動物のアレルギーがないかをチェックをし、さらに開校式がある場所まで誘導した。

子供たちを整列させてから開校式、さらに私が担当するラマ班の子供たちに並んでもらって移動し、ラマ担当の飼育員の方 2 名と、9 時からラマ舎の掃除と餌やりをして、9 時 45 分ぐらいからワオキツネザルとクモザルの餌を切り、給餌の見学をした。それが終わった後レストラン前に移動し休憩、ボールパイソンとのふれあい、班ごとの記念撮影をして 11 時 20 分ごろから早めの昼食をとり、12 時から絶滅動物や希少動物などの勉強会を、午後に入って 13 時からプールで子供たちの水泳の監視、スライダーに乗る子供たちのゴーグルを預かり遊び相手をした。水泳が終わると 14 時 30 分に開校式と同じ場所で終了式を行い、入口まで誘導して 15 時に最後の人数確認をし、解散した。子供たちを帰したあとは各場所の忘れ物のチェックと片づけ、次の日のテキストや名札の準備、水泳の時間使った水泳帽子の洗濯をしてほしい 16 時すぎに解散というのが 1 日の流れだった。

今回の実習は子供を対象としたものだったので、1 日中気を張っていて大変だったが動物園職員としての子供との接し方を学ぶ良い機会となった。あくまで子供を楽しませ、学ばせるというのが目的だが、やはり子供たちの安全が 1 番であって、常に目を配り、常に人数確認することを心掛けた。

私は 1 人で大勢の子供に接するのが得意ではなかったので、今回の実習で良い経験ができた。最初の方はうまくいかなかったものの、後半になると小学校高学年の扱い方もわかってきて、言うことを聞かず危ないことをしようとする子供に対しては「言うことを聞かない子供はプールに入れない」などと言い聞かせてみたり、あまりしゃべらない子供には自分から声をかけたりすることができるようになった。

また今回の実習で多くのことを学ばせて頂いた。その中の 1 つに「ユーモア」というものがあった。それは私の担当であるグループ参加者に対してラマについて説明し、ラマ舎の掃除や給餌を教えてく

れる飼育員の方の、子供に対する接し方だった。

飼育員の方たちはサマースクールを毎年経験していることもあって、慣れており、ユーモアのある会話や身振り・子供たちの好きそうなキャラクターやテレビタレントのことなども詳しく知っていた。その結果毎日違った子供たちが来ても、すぐに打ち解けて人気者になっている印象だった。

ラマ担当の方だけでなく、他の動物担当の飼育員の方たちも子供に対する接し方が大変うまく、対応していた。ただユーモアがあるだけでは子供たちは言うことを聞いてくれないし、動物を扱うのでどうしても危険が伴う。従って、その時々で真剣に注意し、怪我や事故がないように努めているように感じた。私は怪我や事故がないように注意はできていたが、飼育員の方たちのようにユーモアのある会話や対応が最初はできていなかった。ただ、毎日の経験の中から子供と接することを考え、とても勉強になった。飼育員の方たちからは子供たちの前で私に話を振っていただいたり、子供を交えて動物のモノマネゲームへの参加など、とても気を使っていた。

そんな飼育員の方たちの毎日を見ていくうちに、私自身、なんとなくではあるが慣れてきて、後半には子供たちとうまく接することができるようになったと感じた。

動物園での飼育担当や、広く博物館学芸員という仕事は様々な年代の人と接することが多いと思うが、子供はイベントや企画をすることになったときに特に対象となることが多く、また、一番対応が大変で事故や怪我に注意しなくてはならないと、今回の実習を通して実感した。もちろん事故や怪我がないというのがベストだが、楽しんで学んでもらうのもとても大事なことであり、実際楽しくなければ



写真：サマースクールにて、子供達の動向を見守る

来園してくれないので、実習で学んだように事故や怪我がないように注意しながら学んで楽しんでもらうとは何かを考えるのが、難しく大切なことだと改めて強く思った。

これらのことをふまえた上で今後学芸員として、もしくは学芸員としてではなくても、たとえば子供や高齢者と接する機会において、あるいは自分が関わるイベントや企画などを実施するときには、今回の実習で学んだことを最大限いかしたいと思う。

そして、もし困難な場面に直面したら今回の宮崎市フェニックス自然動物園の実習で見て、経験した新しく柔軟な発想を思い出して、その時々状況にあった考えができたらと考えている。

北九州市自然史・歴史博物館 いのちのたび博物館（福岡県北九州市）

実習期間：平成 27 年 8 月 11 日～8 月 22 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

松島 百

私は今回、北九州市いのちのたび博物館において、10 日間の博物館実習に参加した。事前に館から出された課題は、実習に参加するにあたっての抱負を書いてくこと、であった。初日は 9 時に集合し、スタッフの方に挨拶、その後オリエンテーションが行われて館内の歴史や説明を 2 時間程受け、午後からは館内の紹介をして頂いた。バックヤードでは撮影室・書庫・組み立て室・解剖室などをくまなく見せてもらい、その日は解散した。

2 日目は標本の整理・保管ということで、魚の化石をコンパクトな重箱に移し変える作業を一日行った。具体的な内容は、以前のラベルを新しいラベルに書き換えるという作業であった。ポイントとしては作業をゆっくり丁寧に行い、ラベルを書き移す際には鉛筆か筆で行うことを知った。鉛筆や筆を使う理由は、資料をホルマリンに浸ける際に、シャーペンやボールペンでは注記が消えてしまうからである。

3 日日も標本の整理・保管の作業を 1 日行った。内容は前日と異なって細かい作業で、昆虫の針刺し標本をドイツ箱から小さなポリフォームに移し替えるというものであった。情報を記載するラベルも 1 つではなく、データラベルには学名・記載者名・採取日などを記入、同定ラベルでは同定者また同定年を記入、またコレクションラベルではコレクションした人の名前やシリアルナンバーを記入するなど、小さな標本にもこれほどのラベルを付けるということが驚きであった。また、幼虫標本の場合は穴を開け、管を通して空気を入れ、大きくしてから乾燥させるといったことなどを学習した。また標本作製は時間のかかる作業だが、展示を行っても紫外線の影響で 5 年で脱色してしまい、白くなるので珍しい昆虫はあまり展示を行わないとのことであった。

4 日目は来場者への聞き取り調査を行った。博物館にとって調査は展示方法や接客などの向上につながる重要な作業であり、今回私たちは特別展として行われていた『スペイン奇跡の恐竜たち』に来場されていた方に、8 つの質問を行なった。質問内容は住まいはどちらか、どなたと来場されたか、どんな交通機関を利用してこられたかという基本的な設問から、特別展の料金設定についてといった施設利用そのものに関する内容までであった。予想外にアンケートを断る人は少なく、県外のお客さんも多く感じた。スタッフと勘違いされて専門的な質問を頂くこともあったが、その際は近くのプロアスタッフや学芸員の方に対応をお願いした。またその日は午前と午後での車のナンバー調査も行った。手分けをし、何県から来ているのか記載していく作業であり、1 番多かったナンバーは福岡、2 番目に北九州であった。

5 日目の標本処理作成と登録では、展示の飾りで使われる貝殻を綺麗に磨く作業を午前中に行い、午後からはノジュールのクリーニング作業を行なった。ノジュールは岩の層の間にあって鉄や鉱物、カルシウムが固まりできたものであり、その中から化石が発見される。最初にタガネと金槌を使ってノジュールを大まかに割り、化石が見えてくると電動クリーナーで細かく削っていくという作業である。私のノジュールからはアンモナイトと白亜紀後期のポリプチコセラスが出てきた。

6 日目は 2 階に設置してある情報館の在庫確認を 1 日かけて行った。作業内容は在庫分の書籍が分

野ごとに分かれたファイルを渡され、在庫を確認するとチェックを付けるというものだ。これは地道で飽きやすいと感じた。

7日目は北九州市内にある他館の見学を行い、3つの様々なジャンルの博物館に行くことができた。最初に向かったのはいのちのたび博物館の隣にある環境ミュージアムで、そこでは北九州市がたどってきた歴史や、公害の克服について学ぶことができた。北九州市は現在公害からの復興を遂げたノウハウや技術を、アジア各地をはじめ世界に伝え、またリサイクル推進にも力をいれていることを知った。次に松本清張記念館に向かった。この施設は新しい建物であり、小規模ではあるが地域出身やゆかりのある人物を取り上げ、彼らが出版社や塾が運営していたこともあるということを知った。松本清張のことを何も知らなかったのだが、展示の仕方などが見やすくなっており、生い立ちからどのような人生を送り、そしてどんな作品を世に出したかが理解できた。

最後に向かったのは、北九州市が小倉駅新幹線口を活性化する目的で建てられた漫画ミュージアムだった。おもに漫画や作家の仕事道具などが展示してあり、プロジェクターを使った展示やイラストを描く、読み聞かせ企画など子供も楽しめるように工夫してあった。ここでは、漫画ならではの、資料をお客さんが手に読めるという身近な展示方法もあると感じた。

8日目はバックヤードで飼育され、展示もされているカヤネズミのチェックを行った。午前中はその後、企画展事跡調査の作業を行った。私の調べたファイルは平成8年7月28日～11月4日まで、15周年特別展として行われていた「恐竜と翼竜のなぞ」というものであった。出張にかかった金額、発送から到着まで起きた問題やミス、契約のサインなどが細かく記載されており、その当時行われた展示が少し想像することができた。午後からは自分だったらどのような企画展示をしたいか、今ある展示を自分なりにどう改善したいかという課題を与えられた。私は「感じる展示」として恐竜などの大きさの展示をより来場者に感じられるように、身近な大きなモノを同時に展示する方法や、恐竜のある特定部分に似た素材のものを用意し、触れる展示を考えし、自分なりに改善するなら今の展示に加えてもう少し音や動きを加えることの必要性を提案した。来場者が「まるで恐竜の時代にいるように感じられる」と思ったからである。当館は年間の来場者数が毎年30万人を超える人気の博物館であり、実習8日目も7万人突破セレモニーが開催され、館長と7万人目のお客さんが報道陣にインタビューされていた。

その後“Carving Journal”という年に3冊発行される資料を年号ごとに箱に詰め整理する作業を行った。体力と時間のいる作業だった。資料はスペースを取ってしまうので、最近はPDF化されつつあるという。実習最終日は、亡くなられた土佐野さんという方のコレクションであった鉱物の整理を行った。内容としては棚の内側外側を雑巾で拭き上げた後、鉱物の中に新しい紙ラベルを入れていく作業であったが、量が多いのでモノとラベルの番号が間違っていたりすることがあったので、気を付けながら行った。その日は1,000個を終えることができた。

今回の実習では、普段博物館に行くだけでは体験できない貴重な経験ばかりをさせて頂いた。人気の博物館であり、他ではできないような体験、実習内容も充実していた。学芸員は私が思っていたような仕事ばかりでなくオフィスワークが多いことも印象に残った。今回の実習は大変勉強になり、今後の自分にとって役立つことばかり教えて頂いた。

いのちのたび博物館は改めて素晴らしいと感じることができた10日間であった。

到津の森公園 (福岡県北九州市)

実習期間：平成 27 年 9 月 16 日～9 月 29 日

薬学部 動物生命薬科学科

森 美穂

到津の森公園での実習は、実習生 2 名で 1 2 日間にわたって行われた。到津の森公園は経営難により一度は閉園したにもかかわらず、市民の熱い声が北九州市を動かし、現代では珍しい「民から官へ」と管轄が移動され、新しく到津の森公園として開園し、現在に至っている。これほどまでに市民に愛される理由を知ることは、今後の動物園の在り方を考える際に役立つのではないかと思い、この実習を希望した。

実習 1 日目は、動物園学の講義を受けた。博物館の成り立ちから動物園の役割、到津の森公園の歴史について学んだ。

2 日目は、初日に配属されたサバンナエリアのキリン・シマウマ・ミーアキャットの飼育作業を行った。この日の作業内容は、朝、動物を運動場に出した後、獣舎の清掃を行い、エサをやる。昼食後、次の日のエサを作り、夕方来園者が帰った後に運動場の清掃をして一日が終了、というものであった。

3 日目はガイドか看板製作、あるいは調査・研究のいずれかから課題と対象動物を選び、実習最終日までに発表または完成させることを伝えられた。私は、担当動物の中で警戒心が一番薄く、人に慣れやすいミーアキャットを対象動物とした。課題を決めるにあたっては、まず来園者が動物に対して何を求めているのかを動向調査した。その結果、反応が多かった穴を掘る理由の 1 つである巣穴づくりの様子を観察し、看板で来園者に伝えることにした。課題を決めた後は飼育担当者と話し合い、後の調査の計画を立てた。

4 日目以降は、飼育作業に加え、空き時間に課題作りを行った。巣箱に土を詰め、寝室に置き、夕方まで様子を見守ることを基本とし、方法を少しずつ変えながら、予測と観察、結果を見ながら考察、までを 2 グループで 3 回ずつ計 6 日間繰り返した。この調査において子どもよりも大人の個体が、メスよりも

オスの個体が巣穴づくりに対して興味を示すことがわかった。また土の質(水を多分に含んでいるか、粒の大きさ)によって巣穴の形が変わることもわかった。高齢で日中もあまり動かない個体が巣作りに対して大変興味を示し、積極的に穴を掘る様子が見られた。このことから環境エンリッチメントを整えることは身体的にも精神的にも良いのではないかと感じられた。

市民に支えられる動物園であり続けるために様々な工夫がなされている。教育普及においては周辺の幼稚園や小学校、子供会などの団体が動物園に来て現場で働いている飼育員と獣医の話を聞くほか、園内を周り動物に触れてみる、解説を聞くといったプログラムがある。かわいらしいしぐさや匂いや、体温などを知り、動物のことを知ってもらう、好きになってもらうことが目的である。また、両親が忙しく、遊びに連れて行ってもらえない子供たちが、この教育プログラムで来園する機会を与える意味もある。林間学園という毎年夏に開催される小学生を対象とした教育プログラムがあり、4 日間を通して動物の事や自然環境について考えてもらうものである。この学園を卒業した多くの人達が動物園を残すための運動にかかわった。

次に日替わりで行われるイベントも来園者を増やす工夫の1つである。チンパンジーの手先の器用さを見せるものや、ライオンが肉食動物であることがわかるように牛のあばら骨を食べている様子を観察してもらうようにした。

展示場の前にはその動物の生態が書かれたサインの他に、個体の名前と見分け方、性格がわかる手作りのサインもある。個体ごとにファンになってもらうことを目的にしている。これは以下に示す動物サポーターと関連している。

動物サポーター	到津の森公園友の会	到津の森公園基金
特定の動物へのえさ代を支援していただくことで、里親として動物たちに愛着を持ってもらおうとするもの。	特定の動物だけでなく、動物の管理・環境といった、広く園全体の運営を支援するもの。	到津の森公園に寄せられた寄付金等を生かして、動物の購入など特色ある運営に役立てるもの。

動物園を運営していくためには入場料だけではまかなえない。そこで、本動物園では動物サポーターや友の会などの制度をいち早く導入した。上の表に示したように、用途がそれぞれ異なっていて、さらに特典がついている。市民が「寄付することによって動物園を支えている」という意識がもてるようになることを目指しているのだ。

資金だけではなく、ボランティアの存在も運営に大きく関係している。100種500頭羽の動物の世話に加え、園内の清掃やイベントの準備、設備の補修を22人の飼育員だけで行なうのはかなり大変な労力が必要である。そこで園内の清掃やエサ取り、エサ作りをボランティアに委託している。これによって飼育員の負担が大きく減るとともに、定年退職している人や専業主婦などの活動できる場所を提供している。

実習を通して、飼育員は動物の飼育や体調管理など動物のことだけを考えていけばよいというものではなく、動物ガイドや案内といった人と接する機会がたくさんあり、割合は7割にものぼるということを知った。またサインや展示物の作成、イベントの準備などもあり肉体的な大変さを実感した。今後は動物を飼育管理する飼育員と教育や研究を行う学芸員の両方を動物園でも養成していく必要があると感じた。

今回の実習で培った経験を、これからの様々な場面で生かしていきたいと考えている。